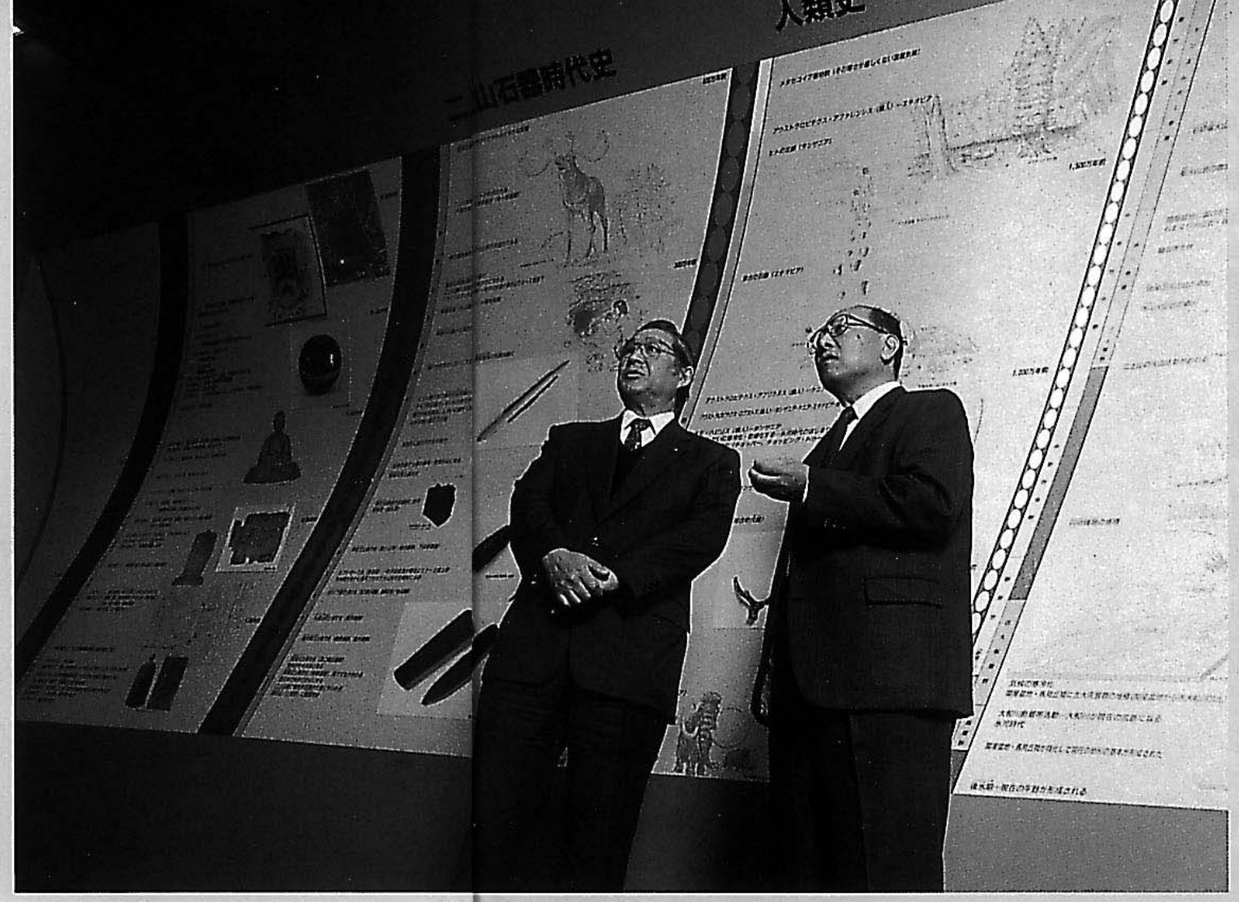
市長 カルチャー対談 瀬田道弘VS石野博信

二上山の山麓は古代も現代も、そして未来も文化・情報発信の基地なのですね。



第１回の香芝遊学・カルチャー対談は、特集・二上山物語にふさわしく、香芝市が誇る二上山博物館の石野博信館長を迎えてのお話しです。古代の香芝、そして二上山の魅力、３つの石の謎などをテーマに瀬田市長との間に、楽しくまた夢のある話題が広がりました。香芝市の過去、そして現在、そして未来が考古学の立場から推察され、驚きとともにその素晴らしさにじっくりと聞き入ってしまいます。

「にじょうさん」か「ふたかみやま」か

市長　いろいろと先生にお聞きしたいのですが、考古学に素人な私などからすると、素朴な質問があるのですが、まずそれからお聞きしていいですか。

館長　どうぞどうぞ。何でも素朴な質問というのが一番難しいんですよ。

市長　香芝に来て思ったのですが、二上山は「にじょうさん」なのか「ふたかみやま」なのか。どっちが正しいんでしょうか。昨日も親戚の子供に香芝のビデオを見せていたら、「ふたかみ文化センター」の中の「にじょうさん博物館」とナレーションしていたというわけなんですね。どっちが本当なんだと子供ならずとも疑問に思いますね。

館長　そうなんですね。ホールは「ふたかみ」で博物館は「にじょうさん」ですからね。これはまさに象徴的ですね。万葉集に出てくるのは「ふたかみやま」で、現在国土地理院などの地図や行政上は「にじょうさん」ですね。しかし本来は「ふたかみやま」でしょうね。

市長　私は「ふたかみやま」が本当と違うかなといっておいたんですが。

館長　二十年も前でしたか、高松塚古墳に昭和天皇がお見えになった時、橿原考古学研究所の所長の末永先生がご案内しまして、陛下が高松塚を出られて、ひょいと山を見られてあの山は何というのかねとお聞きになった。そうしたら所長はあれは「にじょうさん」ですとお答えしたら、「あれがふたかみやまかね」と言われたというんですね。末永先生は「私は思わず現代的呼び名で言ってしまったが、陛下の方がよくご存じだった」といっておられ、古来からの本当の呼び名は「ふたかみやま」なのでしょうね。地元の人はどっちが多いんでしょうか。

市長　それは「にじょうさん」の方が多いでしょうね。万葉集などで興味を持った人は「ふたかみやま」だと思いますが。私たちは、石器時代などは遠すぎて、その程度の認識しかないんですが、二上山といえば、まず大津皇子の墓のこと、あれが一番頭にあります。

館長　一般の人は、万葉集そして大津皇子がイメージとして出てくるでしょうね。ああ、あそこに大津皇子の墓があるのかと、朝な夕な山を眺めるのが普通ですね。私たち考古学者は何万年前の石器が出て来たと考えますが。

市長　そしてそれをなぐさめる当麻寺の曼荼羅ですか。あれが存在することくらいしか知りませんけれど。

館長　だからこの博物館としては、そこを入り口にして、もっともっと裾野が広がっているんですよと、古代の産業の基幹を知っていただきたい、それが目的なんですね。

古代のロマンが広がる二上山一帯

市長　香芝に来て、いつだったか、五木寛之さんの「風の王国」という小説を読んだんですね。あれはあくまでフィクションですが、葛城一族の歴史があり、面白く読んだのです。その時は香芝の歴史とは結び付きませんでしたけれども。

館長　私も随分昔に読みまして、もう中身は忘れましたが、言われるように葛城の風の王国で山野を駆け巡る話がありましたね。それで私がこの博物館が出来てここにお世話になるという話が来たときに、風の王国展というのをいつかやれたらなあと考えましたね。

市長　それは面白そうな展覧会ですね。タイトルもロマンがあって。

館長　イメージとしては、おそらく製鉄集団が二上山山麓におったのではないかと考えているのです。香芝は葛城のそのような中心地になりますから、天皇家とはまた違った大きな勢力があって、その人たちが鉄を中心にして二上山山麓にいて、かなりの力を持っていた。それが表現された展覧会をやれたら楽しいなあと思うんです。鉄ばかりをあつめた、地味な展覧会になるかもしれませんが。

市長　物語がある展覧会ですね。そういう夢のある展覧会はいいですね。その時は五木寛之さんに来ていただいてね。

館長　御所市で製鉄の遺跡が出て来ましてね、鉄と銅です。五世紀から六世紀の遺跡ですから、葛城とぴったりした時代です。香芝でも去年の発掘調査で、鎌田から大型の建築部材が出ました。鉄はまだですが、そういう鉄を扱った豪族がどうも香芝にいたんではないかと。六世紀になりますと、狐井の城山古墳という大きな前方後円墳がありますから、そういう一族が住んでおったということは十分考えられますね。それをもとにして夢を作れたらと思いますね。

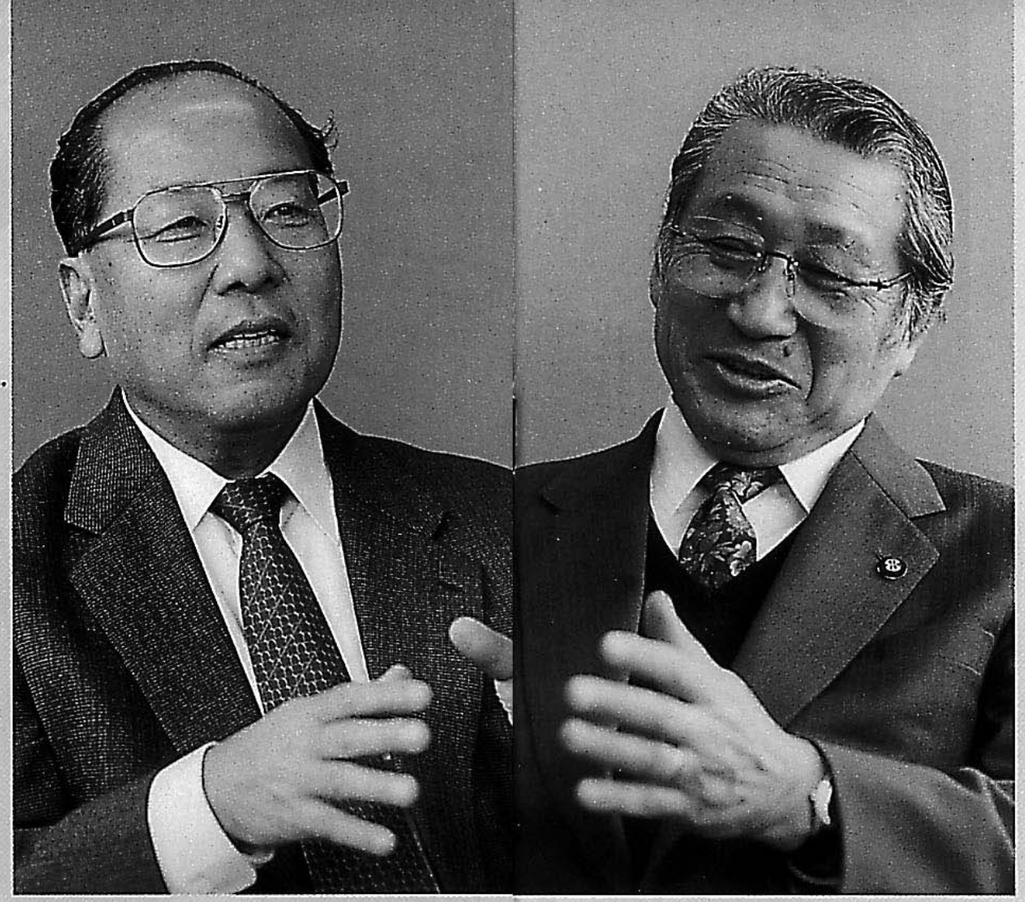
市長　そこで一つお聞きしたいんですが、葛城の古道ですか、あれをずっと行きますと、高天原というのですか、高天という地名がありますね。あそこに天孫降臨があったんではないかと、私は思っているんですが。

館長　そうですね、高天と書いてたかまと読みますね。確かにそういう伝承もありますし。高天原伝承というのは、あちこちにありますが。葛城という地域は、桜井とか天理とか磯城郡とは違って、向こうは大王家、天皇家でね、こちらにはその大王家と対抗する力を持っていた。そういう中での天孫降臨神話というのが、葛城神話というものとしてあるのかも知れませんね。それだと楽しいのですが。

市長　石器時代が余りにも長すぎて、中世といいますか、そちらの方の歴史の方が身近な感じがしますからね。

二上山の石が支えた文化があった

市長　さっきもご説明を聞いて、思い出していたんですが、いわゆる金剛砂、これが日本全国の九〇パーセントのシェアを持っていた。私はかつてカメラ会社にいて、レンズの研磨は酸化鉄の紅がらを使っていて、その前の工



瀬田道弘(せたみちひろ)
大正15年生まれ。神戸市出身、昭和23年神戸工業専門学校（現神戸大学工学部）卒業後、千代田光学精工㈱（現ミノルタカメラ㈱）入社。昭和63年4月西真美自治会長就任、平成4年6月香芝市長就任。座右の銘「誠実」、趣味「クラシック音楽鑑賞・卓球・ゴルフ」、新生香芝市の市長として、その手腕が期待を集めている。

石野博信(いしのひろのぶ)
昭和8年生まれ。宮城県石巻市出身、関西学院大学文学部卒業。関西大学大学院終了後、兵庫県教育委員会、奈良県立橿原考古学研究所研究部長、副所長兼橿原考古学研究所附属博物館長を経て平成4年4月徳島文理大学教授、香芝市二上山博物館長に就任。主な論著には「纒向」(共著)、「日本原始・古代住居の研究」、「古墳文化出現期の研究」などがある。

程では金剛砂で磨くということは知っていたんです。しかし香芝に来て、金剛砂をその会社に納めておったんですよと、業者の方に聞きまして、びっくりしましてね。ああこんな所の金剛砂を使わせていただいて、カメラを作っていたんだなと実感をいだいたんですね。

館長　私は金剛砂というと、学生時代に香芝に遺跡を見に来ていて、あちこちの田圃でものすごい大きな穴を掘っているのを見て、何をやっているのかなと思っていました。それがこの博物館へ来まして、金剛砂の全国のほとんどを産すると聞きまして、これは大変なことだなと。調べて見ると、奈良時代からの歴史を持っていまして、中世にも記録がありまして、明治以降になると大きな産業になっているという。これも二上山の噴火で出来た石ですけれど、うまいことそれを産業に活用している。それを言い換えると、単に過去に取られて、過去の人達が頑張っていたというのではなくて、現代のカメラというきわめて先端技術の産業に使われている。天体望遠鏡にも使われているとのことですね。

市長　そうです。あの天体望遠鏡のレンズは大きすぎて、昔は研磨する道具がなかった。だから金剛砂で手で磨いていたといいますね。

館長　それでこれは良い話を聞いたと思いまして、博物館に来るお客さんに説明する機会には、香芝の石で未来を見るための仕事をしているのだと、過去だけではないんだと、香芝は未来を見通すんだといっています。

市長　それは大変分かりやすいお話しですね。

館長　ザクロ石、金剛砂という最近の産業という石が話に出ましたが、もうちょっと逆上りまして飛鳥とかの時代ですと、香芝の石では凝灰岩。この石が藤ノ木古墳、高松塚古墳の壁画のバックの石、こうした貴族の柩に使われているんです。それから法隆寺などのお寺や平城宮など宮殿の基壇に使われている石材、これが二上山の石なのですね。だから香芝の石材、二上山の石がその当時の天下の基礎を支えたといえるんですね。

市長　そう考えたら、これは大変素晴らしいことで、もっと誇ってもいいことなんですね。

館長　この二上山の石というのは、堅い石、軟らかい石があって、いろんな使い道があります。それがドンズルボウなどに石を切り出した跡が残されている。そこには四角い石を切り出した跡が、今もはっきり見られますね。

二上山山麓は古代では首都だった

市長　二上山で石器時代にサヌカイトを掘り出していた、その当時の「原人」の骨や化石は出土しているのでしょうか。

館長　香芝や奈良県、近畿では骨は見つかってはいませんね。少なくとも何万年前というような。日本中ですと、沖縄、静岡など十数か所で見つかっていますが。残念なことに、「原人」の化石の骨と使われていた道具が一緒に出て来ないのですね。骨と道具は別々の所から出て、その骨の人がどんな道具を用いていたのか、分かっていないんですね。

市長　そういうものが二上山山麓から出て来たら楽しいんですが。

館長　今のところはまだですが。ただ骨はカルシュウムで腐ってしまいます。石灰岩地帯では発見されていますが、そういう所は人が住んでいたのではなくて、偶然出掛けたような所ですから、道具は出て来ないのですね。しかし、北京の周口店では化石と石器が一緒に出ていますから、そういうことがあればいいですね。そうすると、こんな体格の人が、このような道具を使っていたということが、分かって来ますからね。

市長　そうですね。具体的な姿形をした人が、どのような道具を使って生活していたかが、分かりますと展示が身近に感じられますね。そこから夢が広がってきますからね。

館長　世界最古の石を掘り出した穴が香芝で見つかっていまして、展示ではその模型を作っているのですが、そのままでは余りに大きいので二分の一にしてあります。これではちょっと感じが出ないんです。この人がこの仕事をやったんだということになりますと、見に来る人も実感を持てますからね。実際には大きな石を打ち欠いた場所とか、その時に出来たナイフとか、石くずとかはいっぱい出て来ています。そこから何とか石の道具の作り方を復原して展示しているのです。

市長　私もふくめてですが、一般的に二万年前の石器時代から中世までの間が、歴史としては分かりにくいし、馴染みにくいですね。

館長　確かにそういうことはあるでしょうね。しかしその石器時代、奈良県の地域では一番人が多く住んでいたのがこの山麓なのですね。ですから今から二万年前に県庁を造るとしたらこの香芝ということになるでしょうね。そういう奈良県のあけぼのみたいな所が、この山麓で有り、香芝であるということですね。

古代から快適な環境と文化発信の地だった

市長　二上山を控えた香芝はロマンにあふれた土地だということですね。しかし、それほど多くの人が、この地域に住んだということは、やはり何か住みやすい要因があったのでしょうか。気候とか自然などの。

館長　当時の食物は猪とか鹿とか、けものが多かったでしょうから、山裾が住居となったのでしょうね。そういうことでは奈良県では宇陀郡や吉野などもありまして、それなら大和高原の方が人口が多くてもよさそうですが、そこがやはり石で、原材料が取れるということがありますから。実際、ここで取れたサヌカイトが、西は神戸や明石、東は名古屋、浜松、北では石川、富山まで出回っていた。それほど質の良い材料が取れた。だからこそ人がこの山麓に集まって来ていた。つまり工業地帯だったと思うんです。先端技術の集中地という役割だったといえるのです。

市長　そうですか。文化の進んだ地だったのですね。そうしますと、サヌカイトを採掘していたそのころは、どれほどの人が日本全国にいたんでしょうか。

館長　平城宮の時代の都には約二十万人が住んでいたといわれています。しかし化石人の人口推定は難しいですね。縄文時代のことになりますと、遺跡などがあちこちにありますから、人口推定などができますが。それにしても二上山山麓に人が多く住んでいたといっても、今ほどではありませんから、静かな原野だったと思いますね。

市長　静かで豊かな自然の原野で暮らしていたんですね。その頃食べていた鹿や猪などの骨とかは発見されたのでしょうか。

館長　香芝の辺りは土地が乾燥していまして、そういう骨などは出ていませんね。しかし近い所では橿原遺跡から鹿の角などの骨が出ています。海の魚の骨、鯨の骨なども出ているんですよ。だから大和の縄文時代の人々は、海の魚を手に入れて食べていたと思われます。大阪湾岸とのつきあいがあったということです。

市長　そうしますと、古代にもルート、物産が交流するような交通網としての道が海岸部から通じていたということですか。

館長　今でも奈良の魚は伊勢から来るといいますが、伊勢との交流もかなりあったようです。それは土器の形がとてもよく似ていることからもうかがえます。とくに二上山ですと、北と南に峠道があって、穴虫越え、竹之内越えといい、それはすべて大阪との幹線でしたからね。香芝は大阪と奈良を結ぶ幹線道路沿いに発展した街、そういうことは今でもいえますね。

市長　それは有名な竹之内街道ということですね。そういえば、今度、関西新空港が出来ますが、そうなるとあの辺りをルートとして結ばれるというから、やはり昔と同じに新しい大阪と奈良をつなぐキイステーションになってくるんでしょうな。

館長　とくに関西新空港ですと、世界の窓口ですから、大和の玄関口という位置付けが出て来ますね。

市長　そうですね。この間も市町村会で話をしていたのですが、当麻、新庄、御所、これらは奈良の玄関口だと。

館長　今、大阪湾岸道路というのが作られようとしていますが、かつて古代では大阪湾岸沿いは舟で行き来していまして、舟による大阪湾岸道路といったものがあったんですね。それが今度陸の湾岸道路としてよみがえり、その中心として空港が出てくるんですね。そこと内陸部をつなぐ道路が出来て、そして中継都市が出来て来る。そこで奈良と大阪を一体と考えて、その中での香芝ということを考えると、かつて香芝が近畿地方に石材を供給した中心地であったこと、そういう動きの核というような感じで見ていくと、これからの香芝の重要性というものが見えてくるような気がしますね。

市長　だから、香芝は文化の発祥の地であり、未来のキイステーションだと。これからなにか香芝らしい文化のメッセージを発信しなければなりませんね。

館長　博物館では毎年特別展をやりますが、何か文化的な情報発信の役割を果たせたらと考えています。石にこだわる博物館として楽しい展示があり、それが香芝の文化的な情報の中心になっていけたらと思っています。

市長　香芝は石の文化とともにですね。そしてこれからの文化の情報発信基地として、この二上山博物館、ふたかみ文化センターが活躍していくことが期待されていますし、またそうならなければと思いますね。